



1601
6

北窓瑣談後編卷之二

梅華仙史鴉春暉著

私茂
藏書

嘉慶丙辰
三月
小窗男友
不外此意

是

一八橋檢校築紫篠次第岸今の御どり
十三曲より古道と之を過とへ落橋え
心畫 筑雲
天下太平 雪朝 雲上 此七曲より東道とへ 唐衣

相會 領テ 四季曲 扇曲 雲井曲 暮六曲 類くよ

物ハ如此小麥裏と二年生ひらひらと後小四等小々
ち計曲子中引と色々切加えを謂ふと但と滑りて一
越の往と官の立て合せも誰かの多事かと見ゆるやう
そ越す角の算ハ二八法寛き



第一絃 黄鐘二 壱越三 王謫四 勝絕五 黄鐘六 壱越七 壱越

八 平調九 勝絕十 黄鐘斗 鶯鐘伊 壱越巾 平調

此絃子筆の常の如きをり又雪舟酒とよゆる

史一 黄鐘二 壱越三 斛金四 双調五 黄鐘六 鶯鐘七 壱越

八 前金九 双調十 黄鐘斗 鶯鐘伊 壱越巾 斛金

又中空の絃としりり

史一 黄鐘二 壱越三 平調四 勝絕五 黄鐘六 盤涉七 神仙

八 平調九 勝絕十 黄鐘斗 盤涉伊 神仙巾 平調

一元の詩人陳字安南小使にて其國の事と作り 中 小集

飲如鶯滴頭飛似轆轤云々近年本邦少 安南玉の奉物

絃委一、侍よまも詠くらの首りと身ひだりと陳字うえ

一ふうなま轆轤首たましや鼻飲名天皇のも昔くら

とすと御門の徒養毛の御くらとて今も鼻す冷冰の飲

むくら

一魯仲連曰貴於天下之士者為人排患難解紛亂而無取也
即有取者是高貴之事矣 浪花の用立といふ者此気
象りて宝小男のものなりすへ况や字文ひく道を端
づく此事と引ひ大丈夫とす

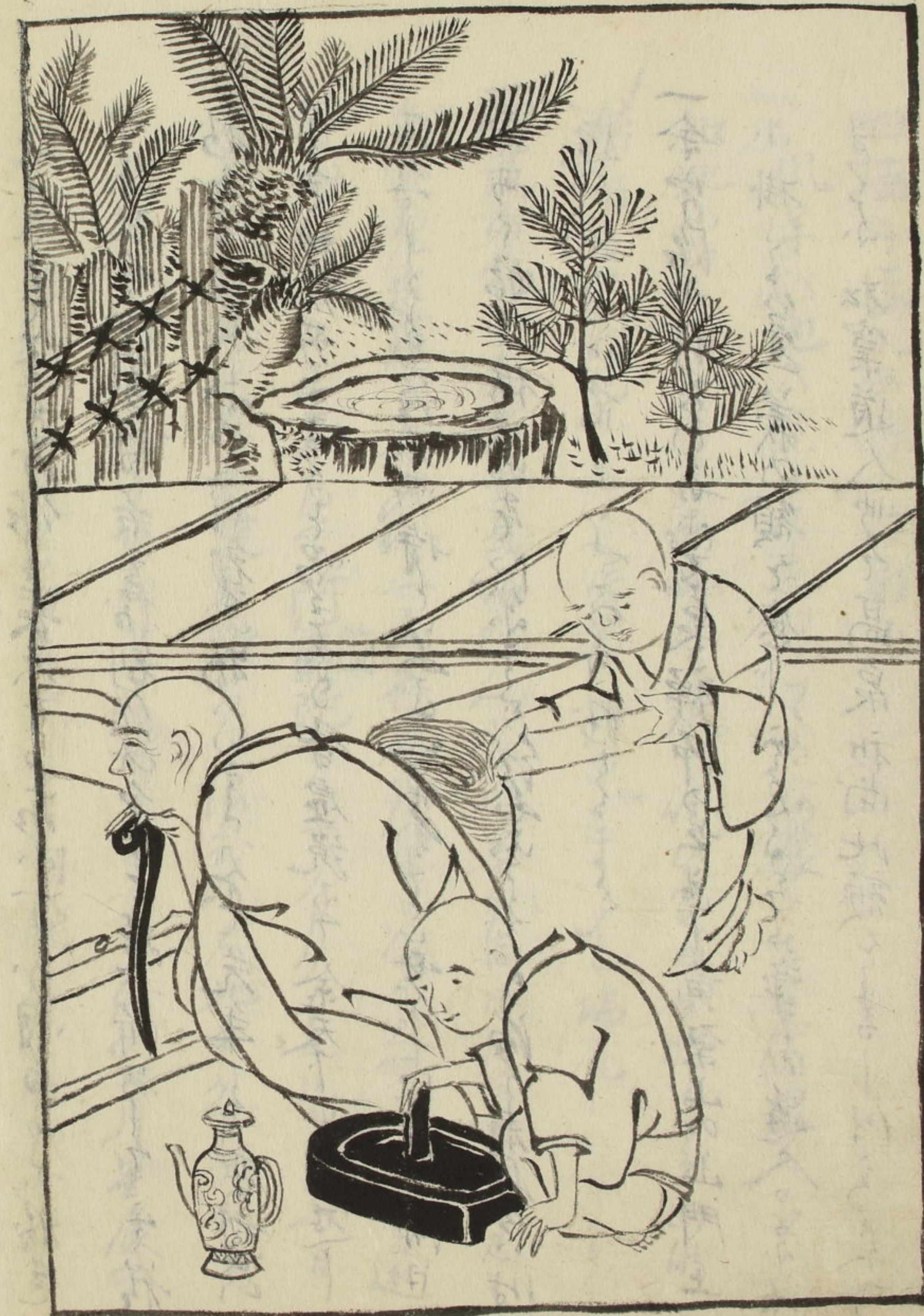
一北畠信雄と上野从信也と信長合幕お族より南往勢北往勢
と異と改今より雲岳川を主界せんとせられ小或老人

曰南小南北の界ハ古引小

凡早の也ア添キムアリテヨリ阿廢トモ志の界ニシテ
如此少ルトヤセリハ兩時を縫小促ヒミテレーテモけ時
信雄ト大河内ト在ク信包ハ津小在クト塙尾小のせ
一寛改の初ハ智泉玉具塙の人岩橋善吉舊日月星辰鏡
並天星遠鏡ヲ自身の上支處セシム多々遠
鏡也後二三年也阿蘭陀^蘭十クトケイキルトソ日
月星辰を覗ク望遠鏡を濱セテ漁翁の人此十クトケイキ
ル伏求也ほく余が明友も一後セテさう所の日月星辰の
真象裏剣の同様を若手傳削セテ目麗と算算而以合せサ

トモアモ生至清作長太也有不一ノ不明白^{ミタマ}也
是モ余が家少^シ若^シ清制作の事^シ後^シ所持テ^シ君
妙^シ多^シ也妙^シ裏剣の物ハ^シ多^シ也先年^シ裏剣
金^シを後流所^シま^シて留^シて皆虚説^シて余天下小^シ歴迹^シ
て尋^シ一^ノとも^シ人所持^シよ^シを^シゆ^シに^シ若^シ清日
本サ^シ始^シ作^シ也^シ小^シ筆^シ也^シの如^シ未^シは
運^シの用^シ也^シ而^シト^シよ^シす^シめ^シと^シ

一余字序小行^シあふま^シ禪師のセキシ^シ黄梨山の山門上
小掛^シ筆^シ義の額^シを應^シト^シ事^シ以^シ達^シ人^シ未^シ
き^シ小^シ松^シ窠^シ道^シ人^シ也^シ高^シ泉^シ也^シ此額^シを書^シ一^ノ高^シ泉^シ



才子大隨和尚傳小尼居是も凡苦しきを忍苦し
八十四枚又及皇子附大隨後事之多くち象は傳の上書
手も少く一帳も起今度は人附て壁に之へと布
を放つて之後も所と大隨もあつて是モ之もす
人と當り是もくして山門を結び金剛の塔とすゆか
て悦一とぞ此額ハ高宗和尚改了とハ十五枚又一
國死すよと彼山中少て今少く碑と彌縁と拂詔
せす

一作勢玉寺志郡小川村ノ御士小川進左衛第者より下
た時太鼓一つと不おさく寛政丙辰の春ノ月不小室

一余と云せしむ實に五六百年以上の古物と云也
桐木横木と用ひハシ合せて朋とも皮ハ片西キリ
敷西に龍を画く敷の径ハ高さ一尺五寸二分深四寸
裏の方も徑ア一尺四十ニシテ底の即径ア四五分清
無裏と不透明の桐木の厚四分丈人の説ハ唐土の物
なると云ふ

一寛政八年丙辰春唐土乾隆帝在位六十一年少て皇太子
に讓位り今年正月元日より皇太子即位年号を嘉慶
と改めらる六十年少て讓位りしてハ康熙帝在位の
年数と並む年と憲皇帝又二甲子を歴し

かづや何もぢれ希代の盜車をすすめの上渝り乾
隆帝の上渝りとて施行して唐土普く頒賜
長崎へ渡るも唐人の持つてゐるえ使して医学院
少くせし事なり松山外記

一春暉七八才の時或夜父母の宿主折節而え考盜みと後床
いのりゆゑにまきよふすと行車もすと尋ねる
小先考ゆゑも渡て少モ一と以革代牛の章を講じ
せせじ小姓もむきよつて注居たゞり小先妣も
見ゆひく又が廻りどね是くえ考て教ひすとおも
益よとゆゑ、漏泄するゆゑは間ある事とひなむ

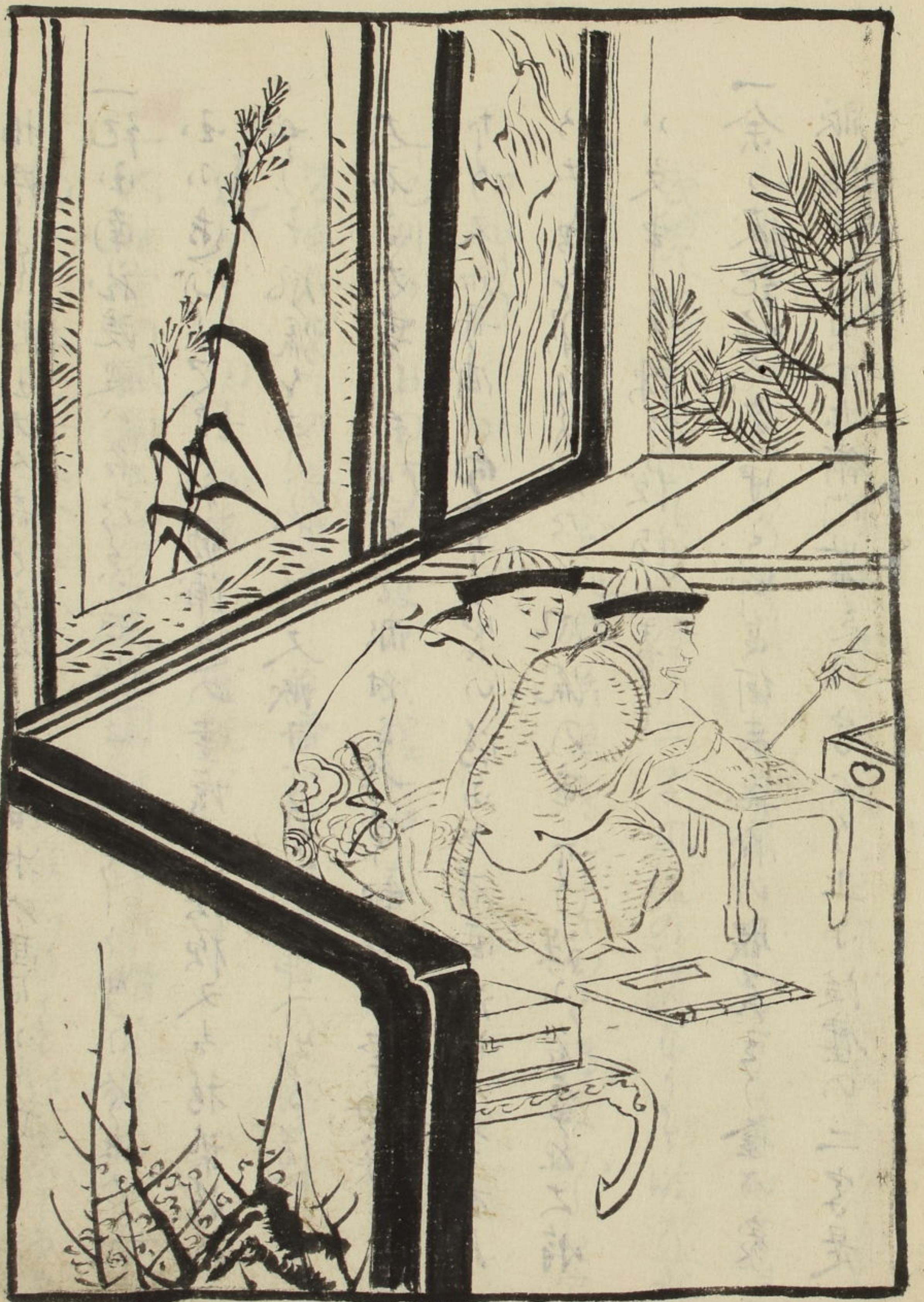
此氏子亦四年の彼童と満て三十五六年の昔を
そのかゝり又母の恩義の深くも新あらず小
算くし

一香川太仲若き時沿廻の為立せず小はひ遙
少て小水を便せしる毎一人いづれかと向て小家
家は内に便所へ便りへり收の耕作と利とをすく奈
何ぞ途中毎日と便りとて人と名づれりと太仲元來
豪放の氣質をもあらす所漏れ切そ殊勝のゆゑ
一寛政八年丙辰奥州南部の私漂流とも安南にむけ
を彼より唐土へ送りキ年の壬辰長崎へ送り居れり

難風と達一十三年にて日本に泊まりて安南国王
明主とて在位久しうて寛改丁巳彼國より景光五
十六年とぞ景光ハ安南王の年号也

是も寛改七年を度蘇列仙臺の領にて海邊漂着せり丙辰の春
仲の漁人七八人仙巻城下小石亭より南東へと脚伺ひ
を御ゆきのら而日許も唐人より其の仙巻城下小逗尋
其島の役人ち志村義義とて先年落水漫遊して高師
ノモズレ過るやし学者すく仙巻侯の儒真とぞ奥列う
唐人力運昌せざるハ故ノ由也あれど法人卫物小行墨迹

を乞又ハ多く之く詩を寄せりとぞえ未漁支のまな
キ多き文音少く跡も乏苦とぞ詩も譜も歌も妙也せ
一と名底教とぞ奉手を以て法人の乞小亭にて物
或ち扇面を以て其處又過るゆき写照されど詩作後も
故多く詠ふれど其處も上達し詩と歌と墨と筆と内
二三人九絶句をかく作すやう底まく白アの
脚下知るべ後も詩へ逐りきれり此と後底送うの役
人たゞ途次中で醉吟りと云ひ又絶句たゞ數首作り
藝術の如きとも余う方とも途中の作并聯々あれば去字
して贈もく彼國より日本より書寫字同せり



物語るに彼の人の意奇とぞあり 聞か日本の方月少とて

一紀由南院院殿ハ名なふ武将（あやまつ）と號小今余從
玉の遊び（アソブ）ノ如歌浦邊の塗塔の模様又其移築時の
やうを風流をきめれり入城下より和歌浦へ出る道の上
大石とお書（アシタシ）て文字を附けられり朝鮮の李梅陵（イ・メイリョン）
たり又其哥浦の室（ムロ）を官の所ゆる石西流（シ・セイリュウ）李梅陵
う大字と附けられり風流の事なり珠小名多羅太將
ハ文キも跡（アシタシ）はゆりも

一余々友紀侯の家中と野呂何某秘底の服装焉う金の象
服諸（ムツ）眞田庄衛門帶之の字焉う上小笠塵の二字是

一も象眼（アシタシ）入りきり其田の絹（シルク）や作ハ宇多玉沙（エタ・エサ）
一象玉廣（アシタシ・カウ）りげたりとよすも象眼（アシタシ）入りきり眞田幸村
一此界の事とひくは達塵の二字風流の絹をうそは不民
夫乃と見玉がりど此服装高き山すくい付木あらむ室
刀をも其間附て歎せし事と云ふ也

一紀列の土小田行系更に鎧一領をほりそ邊のす法
皆白石先生の著す了軍畠考中の楠とア達小才法度
達ソキ小田子秘藏して嘗號ひかみせ

一大雅堂の画蘭亭歸去來西園雅集皆小楷贊辭りう此三
幅をそ年七十五回小赤玉の詔往りうと近世の書画

かくす科、坐り及び次大雅堂の書画の秀才
や又函今都鄙ともに書画流りを忌みて被画幅をより紙
表具をもつとぞ

一肥後主の代の山西垣氏寛政六年長崎より奉琴をばた
て宝相の琴と朱波所持の物ありしに西垣より紀
が作の其圖様を模ちり余り人うけこゝに國へり。眞
物なりやい

一伊勢玉神系の陽の南小小倭郷中佐田村の所紀貫
之乃塚をいわむとれ也

一紀効新書、明の戚南塘の著を所へて其家有益の書也

又此同人乃作小煉瓦諸書としよせ一枚あり。南紀
小田氏の家とく此とと一見す珍古をく其主と
ちく、戚南塘の武名故傍そて明末の人偽撰すよる
紀効新書の本あるをく今後小學書院

一唐玉と云法圓ふ祭り下の孔ま子乃像杏壇の是多を侍
立のす子十四人なり。左邊の泥小十哲小曾子有子子張
子羔をひたるをくとて近づに近づ玉小
川村石樹書院所蔵の杏壇の墨を引く小亦十四人なり。李
仲和の画なりといはへ印化ばす。又石樹書院所蔵の釋
祭乃式をより卷物をほどき。先鏡小十哲小曾子有子

子思孟子と祀り此養物ハ明末の物と云ひは源東屋の
況よつたうりほもゝ是ちも無き也

一庵唐小一士人行乞者也常念弘忍深懐佛道曾
仰之より每人相善庵と称せ事を忘セモ奇多の
人あり佛画を多く画シ又怪文の文書を細工し
手書きの如く佛像小ちや小画に信ひの人小ち附年
を雪日の行御たゞはれり彼玉小りし此人を并せん
庵或附別名夜戒物語セシムハ夜支人釋迦庵
禪寂法の折扇にて若ビ女入夢にて三昧縁を岸吉鷗
哥を艶ニテシテを追シ及く何をかしめく矣く矣

主のらるゝ美人をえまも情モテ秋モツツのモレ下
サト年若た人を渉ル高モテひあれ事ふゝてトモリ
ト告シシウト若余清くた若麻吉庵唐の人に余
彼田之存トヒ殊小親ト立モ一人

一東邦の俗十月と神毎月トソカ書を説人於の異説ミ
キモ皆吉海附會の説ルヘ信も少アモ余考ニ小
牟知伶倫家用了律呂の配南臺越律と黃鐘律小牟ニ
十一月の律とも小十月乃律ハ上無律ニ當ル是小併て十
月を上毎月ト立モ

一紀長和歌山より二里をり東小岡田と云所立モ地小

東家の角之進と二人きり東家岸正次弼乃後亂ふ。一
家をうき家ト肯ト吉山の壁壁を林はづく今ある
珍藏す。とて今家の草履花河内を三左衛門物語す。
一宗の昂耕和尚大徳寺の祖南浦を送る諸小云 相送當
門有脩竹寺君葉々起清風 白泥和尚此諸を凌て喜て
曰得言詔三昧。とめ後白泥和尚僧徒小佛法を説示も小
自由をねぐれ一とぞ

一淮南子小文王十五歳にして武王を生むとも。聖
人ハ天地の秀氣を得しも。とて其隣陽の氣
も又充る事。の早さ也。

一段のほひつるる物。や和漢ともい古の法の絶れるを
さき残念。あれ外科大成が。どく。聖胎の法ハ矣
ふべきの甚。一々。また。一
一まつた日本。のよ。萬。小。勝。上。昌。ノ。唐。土。の。産。左
ト日本ノ。生。左。に。も。い。は。す。と。よ。用。日。本。の。肉。少。す。左
甲。ひ。り。一。國。の。け。に。す。其。他。の。差。別。う。と。す。浪。花。の
前田氏所持の茶園根及び山の近道。小。行。ノ。茶。園。の。尾
林村。を。走。る。す。と。木。之。部。材。小。走。る。す。終。ニ。二。村
内。右。三。里。洋。を。隔。て。な。木。の。部。材。の。走。を。移。到。上。昌。ノ
甲。井。用。ふ。と。す。す。あ。と。前。田。氏。物。語。す。是。

のくも衣冠別録の羊左の量のそと首合せをかひて
黄連茶合し日午のを方圓の勝をうそそ

一渡見細井先生赤心報國と上四字を形白たる刀ひ帝小
ササキミトツサ居居の義田伴達此刀ひ得(は)て
所わやく余在内氏ウラアリサハハナヒタヒ賀守金造
他ウラ長二尺三寸幅一寸三分四分深さヒシモリ殊
の外の人物もむだに赤銅一枚として其の裏
表々赤心報國の字置よま見えり楷書たり細井先生
自筆の手書依成井先生寫定の跡すと見えり等ハ
後のすうの角弓も厚い猿頭ハ弓もく竹と金象眼

小少一入きよく柄ハ太絵巻たり赤心報國の四字ハ毎首繕乃
脊中少點ト居るいし文字ナリトテ
一浪花の松木周助奉時道人と号する人の家小三足の蝦蟇
の乾物もじ詫名家の詩文もじて宣小奇品をすと後の物
清少人と年又六脚の蝦蟇をひそと天地弓無紀物を
りゆびとぞ

一河内玉坪井主の社勢ヶ田修理ハ石川源氏の後胤ち
石器物多く而おやくハ情有即の写もじり梢無しの鎧
しもく神功皇后の鉢もひくす鉢長刀の妙小りてひ鉢
アトリ金物もじて柄の傍小字を有たらまのま

憲廟 有徳廟の御時少上覽小入リ

一伊勢山田外官の宮崎の御文庫小猿藤太秀卿の太刀も
有徳廟の御時上覽少入本阿弥鑒定を思レシビト用
オモ唐モ官モ白鞘と絶アリナリ作神息ト云ふ
ノル船ハナ一長ニ尺三四寸許直幾ナリ柄とオミ同
船少々連ナリテアリ頭の飯を抜キイ金物をえヨリ
鍔頭の方、ほりナリ桶の底厚サ三不許元末の鞘ハ木
錦少々包ミ漆を塗ナリシ小刀の奇製の物ナリ

一伊勢松坂の西三里许小日川ヒシ所ナリケレバ五輪の
石塔百餘基ノ中少一つ無石少唯有一乘法より五字を

斯ナリ石ナリナシ少ハ文字多カ堵ナリ候テ平家六
代御前の石塔ナリヒ又文覺上人の碑もナリヒ日川
ヒシ村、坂坂山乃篠矢下村の隣村ナリヒ六代御前
の舊跡ヒシヒシヒシヒシヒシヒシヒシヒシヒシヒシ
一寛政九年丁巳九月住弊玉掃田少ヒ吳歎ヒナリ民家
八井の中ニ有ナリヒ捕ねタリ形犯狗の子毛色茶
褐少々細微の聲毛多四足ノ丸玉銬少々就ちの丸小似
一子画長ノ月日至ナリ人モ名印初引手ナリ後不認
ア旅人小諸子少彼玉望ヘてミヒシヒシナリヒシヒシ
ヒシヒシ伊勢山牛小きエアミヒシヒシヒシヒシヒシヒシ

たゞ彼舟中小舟ぢともヨアテ少く御用舟と我友又稱

田ノ奥田太民物語ナリ

一鷹郡海傍にて三大邑シマニ木ノ本 雄禪 長崎とて皆
千軒の所ナリ主地猿籠川レも頗る富饒の地ナリ雄禪
木ノ本四シマニ浪花ウタハ山奈回道又近ラリ嶮岨を越エ
大和小吉鷹郡上古村小出仕者ハ二日とて上布小達を浪
花ウタハ四日シマニ而て達そま日ハあて仕者ハ三日少とも達モ
と云北山を姥ヶ屋掛シマニと云玉産山の一里西谷馬シマニて行モ
地を主産分付と云姥ヶ屋の事シマニナリ二筋行シマニ一筋と
池の頭角シマニとよさ山の峠シマニに通す池木小神靈シマニ

又池水の中小波木とし物シマニて都此波木水上小波
行シマニ子シマニ必大風大雨等シマニとす

一王臺山ハ鷹郡の奥小高シマニ木ノ本郡吉野郡の深山中のす
山シマニ併勢の三川並野の新宮川紀列の紀の川此三川
の水源シマニは王臺南王臺北王臺の三峯行シマニ王臺ハ
最高シマニト

一鷹郡東西をもく石累シマニ近一鷹シマニ南北を極く海
濱シマニ小小入シマニ終シマニ五六里六七里シマニ大和小吉野郡
ナリシマニ東シマニ行シマニ竹林シマニ松林シマニの山奥小高シマニの平地
ナリシマニ六七里の石シマニ氏家木ノ本のキミ山奥小高シマニ村

行ひまく一里半里必民家を仰せん平地なり
左より志れど四五丁とサ向にたら平地ハ絶てたり
一承久二年三月朔日御陞替合より記録卷物を判り
祠等詳々奥書小西園寺相國公相之御自筆の事と以
てあるを特明院三位家時卿許可門人井上光美書し
るをたゞ

一
走馬 右未添 龙勝 持

二
走馬 右小疊疊 龙木漬 持

三
走馬

左花園
右狗犬

龙勝

四
走馬

右賢恵
右三等

龙勝

五
走馬

左十二時
右引脚

龙勝

六
走馬

左大鳥
右董翁

龙勝

七
走馬

右脚前
右強持

八
走馬

右小唐元
右強持

九
走馬

右白毫象
右新白象

龙勝

十
走馬

右毛髮
右良道

龙勝

十一
走馬

右謂橋
右疊繩槽

龙勝

十二
走馬

右良道
右元興寺

右強持

十三
走馬

右牧馬
右空象

龙勝

格別之空物不及
勝資之沙汰也

一
延長の御物小名物の御陞替十七西

右今ノ茶亭家小

御所持の巖と云是也此十七西の内をもとて

一
當今伏見宮の御御藏のオの御昇替と大虎と云今ハ甲號

れもとと云之年并見と云ひ

花園帝の勅封と云七日

深齋してお見えま

御
官

潔齋と云はれて御昇替と云

の御御藏やをなすされり次の御昇替を孔花

をもとて各物をもとて

一村草と上昇を守る 離れて修築山古を具や小ま
草と少く村草と甲の裏小見えされどおとと渡て古道
奥の舎たゞ、每小いもよし終小四又三小いも少く買
二三年もさうが後小毛張の人をもて村草をもとと
かく後戸の方へ全七十五両少て、うそりと今
ハ何人八九人アホヤ

一寛政十一年の春五月大陽山の人池田五三郎にて全
う家小追る一余り者に本の下のびとをうつて新小びと
一西と化イケルがち始て都より送くもとて新小びとの
経を美助古トナリ余り家のたゞとて

一澤庵和尚ハ道長の外尺素半引ノアシテ名ニシテ
初称もアラミドアガヤのよき、某人のよててモモニ
シセトヨヒトトカハタニテ和歌の道もいは應キトハ
丸光庵に脚立の而有しモクニテ中西りとす多忙
アリハ桂鶴の歌

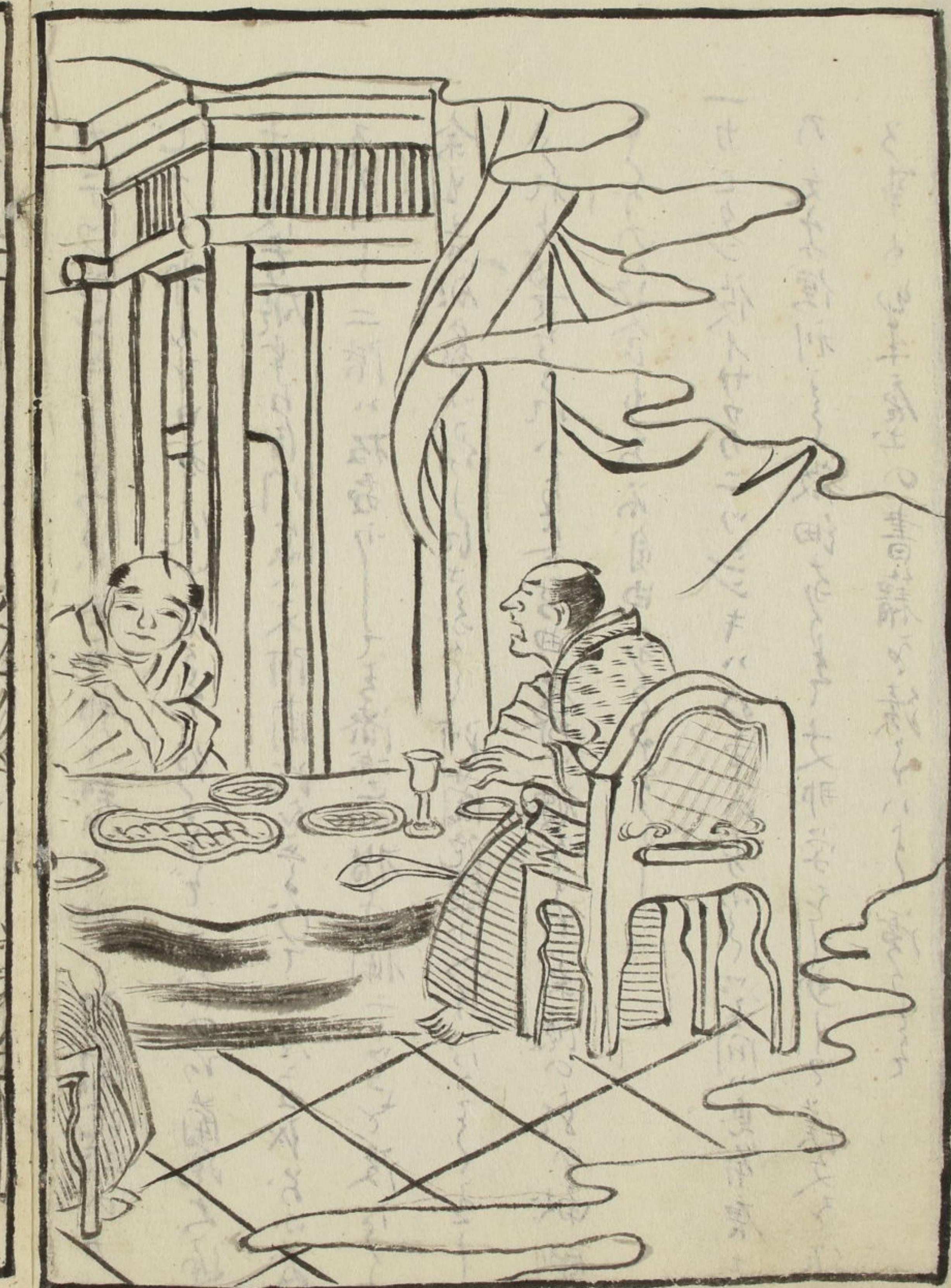
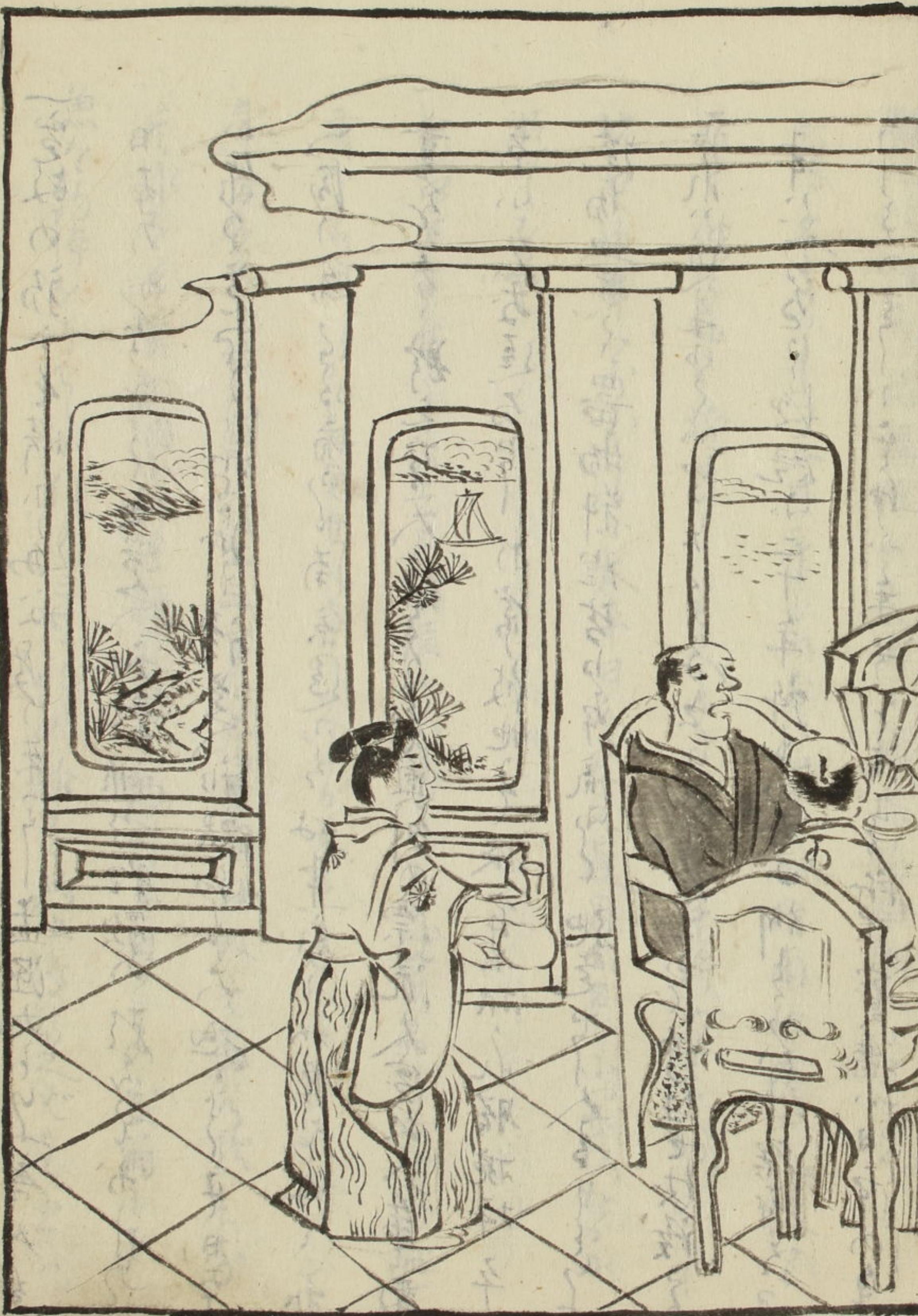
むろの年よハシヒに時も日ひひそ物もあらりぬ
光庵は殊の感くも入服未だちの修正同月の清小行
らしく書奉りテハシヒトモ近石の石代和尚の右角の浦
學馬丸光庵の脚立をも取リゲ是をも重ねて於多忙
一役の年秋の文もる今夏房のわ校何を又生年

一 安永年間或諸侯へ朝鮮國より移り乾隆帝へ朝鮮王
遣使上物の物ハシマニを京郊御幸町の形跡師長帝へ
赤銅の手爐の火を小ハ重きものかしを至極丁寧小内
行儀ハシマニ價五百金のトドキ地金のスムハ云々小内及
形物のト寧モ第一の精力を云々遂ノ東小大日本
越前大掾長常と金の象服詰ハシマニ贈ハシマニと象服
も千両リ象服とて年ハシマニ廻ハシマニす小内及の細工ハシマニ
たゞハシマニ等ハ西日本の事ハシマニ

一日本のア摩アマニテ萬小物ハシマニ小内仕方ハシマニ安
承天閣アマガクノ下小内侍アマガクアマガク河園院カヒタニ役イサカ

カニツシニキと云ふる本邦の製ハシマニ幕ハシマニ阿蘭陀アラント講ハシマニ
ビタニ部ハシマニ日ア流ハシマニ小作ハシマニト行ハシマニトモハシマニの阿蘭陀太通
ま役吉^{アマガク}幸石アマガク阿蘭陀アラントを主ひて一ヶ主役ハシマニお小内
毛ハシマニ二階ハ板蓋ハシマニアマラニテモ漆塗ハシマニの椅子ハシマニ圓^{アマガク}ニシテ役行ハシマニ
余も吉^{アマガク}家アマガク小作ハシマニに主ひアマガク阿蘭陀館アラントアマニテ
されと見ハシマニされハ主客皆曲^{アマガク}縁ハシマニ腰ハシマニト^{アマガク}茶酒アマガクの味ハシマニ取
之手の飲食ハシマニも云々不自由ハシマニと云ハシマニ

一カビタニ役イサカカニツシニキハぬ車の男ハシマニ是^{アマガク}同^{アマガク}鬼^{アマガク}唐^{アマガク}
乃文字便利ハシマニ微細あり主^{アマガク}丈那字アマガクヒサツアマガク漢文アマガク作
之事ハシマニも其唐土アマガクの書籍アマガク讀ハシマニト^{アマガク}清アマガクと云ハシマニ



一室改の筋小を將小へあは廢く未うり。孟渢九より唐人。も
日本のかなをくわざく和歌謡歌の歌もかゝり
作と定て、わざはく後之に相詣めたり。他ハモロモ日本
の國。ある事あり。有る處は、まことに。本家小和子を好み。和
書を多く贈り。那人も多くも。奥列の漂流人。室改八年。南
京小久在迄。やがて。お京故地を振。京本根。化服。櫻坪。平
達物。西。墨物。料理。皆。り。年流。也。死を。や。人。も。も。も。
されば。本かく。いやうを。よ。少しも。唐土。かく。今。生せば。漫。る
本。に。う。る。も。次。題。小。二。十。年。許。も。い。ふ。何。と。く。り。唐土。と。見
し。もの。多く。小。そ。中。小。年。号。を。滿。山。所。小。寶。唐。日本。の。年。

號。す。日本馬場信氏。著。周易指南。抄小。又。え。と。り
た。文。多。一。三。十。年。も。以。あ。に。信。氏。の。指南。抄。唐土。小。復。正
店。く。彼。方。ゆ。と。復。生。す。と。い。二十。年。許。ち。ま。く。か。の。ト
次。や。近。年。美。毛。も。小。太平。日。久。文。延。月。八。日。小。宝。唐。本。を。
放。す。を。や。
一。余。は。ア。小。售。ト。い。去。ル。諸。候。の。座。少。く。も。ば。ま。弱。だ。ま。と。火。藝
者。と。石。と。と。海。で。せ。す。も。み。と。が。志。上。手。少。く。月。火。藝。と。手
串。多。少。ト。重。桐。と。柄。出。二。方。少。少。を。内。本。收。を。お。ん。灰。を。す
そ。水。を。と。お。の。内。入。と。短。た。禁。約。計。を。付。く。の。主。翁。下。し
魚。を。約。体。を。す。や。小。れ。く。三。寸。許。の。鉛。を。約。上。す。り。之。ぞ。り。や。か。ハ

酒の肴小石是ち何をまつた作をもすとあはれのままで
の水を捨てて中少砂盆のを茶葉種火をあせし蜜のけは
防て又をつぶさるのよふあた風呂をひておひくして
おおきなもびりとまわらの蓋火用く小併の砂中少二茶碗
青茶十が小生むる是れはくえをぬ物小石と令を又
紙にとまく掌中少杯もほのふすとちもじゆか懸
掌中少脇もとを急ち花と成て尼姑は千奇の術教
く日は暮れてもくつこくよばうして幻術の如小火
うちまく唐土の花慈う盆を鬼りく佛も奇とすまく行脚
もく

一筆多佐渡の少金山の役人崎川氏上京アハ徵恙りて詮
其弟さへはゆく金との事を嘆く少金や塙幸と紫と青と
必主後病を嘗て死もアハ三年五年達江を七八年十年
かみとておせざるハキトシナリとて而て彼もややケヒ
青の病氣の嘔嗽也く白色多く氣急の氣味もとて登つ
投もとが苦睡度の事も思はく宿かく常のう行も健行も
ちりかじし此なると半年或一年许中には羸弱して犯
小病は山病者一人も癒ひとてはとて薄度の金山そ
れ此病終へつとをも嘔嗽の声へつとひがりて有小名とをと
そ落小石も少金銀附湯もに堪えず少病多く是れ次

の油瓶（アラシ）と小舟（ボウ）とを人の呼吸小川まで奥（アシカニ）へ肺臓の
空氣を細烟若者（スモーカー）が空氣を半分半分共に此小口此氣をもる
人全死の所の祭（マツル）を了（ル）はるか處給食をもと並小食
をもと令法事（リョウハジ）と酒淫乱喧嘩（イニヤク）浦（ウラ）をもと憚（アラシ）らば
頭（カブシ）の人の命令をも用いもと無糧の惡少年を小合（コウガ）に
者牛（ウシ）をもつるし凡事をも余多年け病（アシカニ）の方（カタ）の考
察近酒庵唐玉（カクシロウ）一方（カタ）にほり別小医活小記（カクシロウ）又
食を増す定を修ほや（アラシ）と云定中の傷く場所代エキ（カクシロウ）
其で小色（カラ）の各り（アラシ）歎（タク）盛小壺定を奉盤（カクシロウ）と云ま
き越て（アラシ）と云もうと云も令事（リヨウジ）をも修ほの方言小言石

の大やく灰盤（アラシ）をも詰て（アラシ）と云器の元を取下（アラシ）る
事體（アラシ）と云はれし定の源さ半日活（カクシロウ）と口（アラシ）の全の薑（カクシロウ）
は根傍入（アラシ）と云く根の蔓（カクシロウ）は浮上（アラシ）てもよそく全
のるハ石へけほよ根（カクシロウ）は浮上（アラシ）てもよそく全の
所小あらか此薑又車酉（カクシロウ）よりてあ此門（カクシロウ）キトモ是
ハ天の道引（アラシ）にて延々よ在りて今（アラシ）の定淨（カクシロウ）と風氣
絶て地火底半是故彼地（アラシ）ケダヘト云ケダモトアリ與に
入と人の呼吸も絶て死を取サフ多叶（カクシロウ）をも全多く
もく縁（アラシ）と欲されまテ書とて燒心草（カクシロウ）を括削

林の下りて皆心草へん三四十四山筋も入る。○山氣の病余
志温補の薬を呑むも一人參りもせても用ひ附はず死ぬ
とその食を汚す。古元年久々されど岩前より英泥流
毛糸く清きはくまつて禹餘餳の石中さとのく小夜
う星故佐波少てハスホウ石とスホウとハ蘇木とよすこ
赤灰石と心木とくとと無とも石のみハ黄褐色あり
薩摩玉ふくナインチニヒリ御や薩摩のギナハキ品大
小異なり○穴の付合全を埋め尽し穴の崩れを止め
林の下りて宿所に入りたり又庵中に入り乃ち宿
のあまを乞ひゆかれて左水を生きて役員の人足あらず

水をうへもあひたる骨車の妙によろこび又上の物語
鳴川生れお詫ちうれ

一休和尚の母君未頃小一休亦尚、駄馬をさみの里と
字丹翁れ特徳、厚きを傳て記も文云
未秋等婆婆の縁で江毎處の都小城御才と土家小成
里色の佛性の是故廢にチ眼すく秋等地獄下落り
さうり不引病す不原とくまつて秋迦達磨ゆく奴と
すくまつて人小成もひつて俗とて石井の佛事等
脱法しゆく後す小一字不說と宣ト六秋と見被し悟ら
ノハ所要りけり莫妄想りとく

一
九月上旬

不生不死子

ナキルよへ

すくもく、方便の説の、次守う人を差せ出と曰。草小山
白ハ多の法聖教をうる候す。佛性れどく廣く才へけ
みやみの本も解レゲカツ

リはよどむかくもえぐむこれでハリミトモアヒ水立の体

一文湖洲竹詩一字至十字爲句

一竹森寒潔裸湘江頽渭水曲惟憚翠錦戈矛蒼玉心虛異
衆草節勁踰凡木化龍枝入仙坡呼鳳律鳴神谷月娥巾披
靜冉々風女笙竽婧簌々林間飲酒醉影搖樽石上圍碁輕

陰覆局居太夫去徒悦椒蘭陶先生婦來但尋松菊若論
煙樂操無敵於君欲圖瀟灑之姿莫贅於漢

一東山官庫小二年宗近相列正宗等刀劍意候後北渡
主三事と其主官庫小械ト正ヨリ益々絶縁の爲能
か接合トシテ御身せよがくも之の脚筋に至
ノミカ歎登定の達人神田白毫子小倉也九度改而辰年
白毫子の次奉小倉と同懐壽格を達て東山小倉と被承
きと傳へるトハト奉於今度れ接合達トと派手のオ小
アツテ規模のすこし

一宣政高麗主部ニ至新地ニ門連ノ里田伊周トソラカ

派は三ノ世人トハ包丁菜刀才れハ派はを一ノ三人
同利少くほり併リサキカ派はの各人をめりテシテ三人
トソラカ歎登ト宣政の初トソラカ派はとちサ待洞後た
もひそて法ナ派はと多キト派はトサ化の彼處の法と
ハ別居ウトセ其ガト除以テ名作の號也此或、漫の
札字取切ト派はトソラカ歎登ト印紙を代わル不勝、とくそ人の
況い御湯小用タリ歎登をやくされ、音矢燒又は心筋と
の字トモ卫中不立ト御湯をハモ堂の字トモ達又は
ハ御工物えれハシキテ申ゆ出奉るよモ、燈又はトモトモ
か色味ある小字トモゼトテ牛じのヤスリ月をとくとも

統又あるとすをも他の腰刀と云は大正吳子と説
もうふ是の他腰刀と云ひ淺小の洞の和やねまえ
金子と云洞代へとて入と故く打手刀と云ふ
もとづく只り徑し是の法ハ別小秘傳もとづくべ
北史藝術傳曰秦母懷文傳曰懷文造宿鐵刀其法燒生銛精
以重柔鍛數宿則成剛鐵以柔鐵為刀脊浴以五牲之湯淬
以五牲之脂斬甲過三十札也小刀にて見れど是の法も
ちと年少うきよ

一正た年ち腰刀を云い槍子子行きて好事家競ひ諸道之
諸侯かし數万金の方紙を以て主事方争ひと云ふ

三都の宮裏候云れ諒士が某少し名を人うへ余う又
乃のまほゆも乾え重寶の大元一文を金七十五兩小小束
一人多く又少ひ一六得一元寶一文が銀四貫目半費
トヒ又皇祐元寶と金百兩少くねと二文の殊金百
金少かまくと不直一錯刀などハ至らぬ、致百合の物
されとも海内小真物ありと云ひうきよ

一寛政七八年のに俗小唐が古鏡と云草大正世小引とて
もやそ本小をねと云宝色白く葉の縁白く或葉をく大
きよ一木円一千二百兩と云齋い本急多々耳も驚く辛
ととい一木に列參列追一小車の價千金小乃至ら物もと

ソノリヤニ夏令せよハ植木石のか一キ四百石小古
皆彼へテ奇中の怪半とシベリ是モ高麗の草利を行
るが為小伎家財も多きを以テ累々行のたるも云ひ
彼方ト賣りどもちひに附モ價あ拂リて終ト如無
トあきらかう是テウ爾の奇島牡丹れ名花を價而
金少もあまきと人の物語少のミタケレバ百金の外に
山草ハシヒツツモ及バズキト小世上利ツ合はんもアリヤ
ウカムロリモアリシメモ

一列山田の油井本山内古繁伊勢の山中を作派を加
鳴矢川源流すと奇不ぞ集め姓る名も一モ外少モ三
都の件代好半家候事の送入藏石比名少主也人逐年夥
一金も落葉の奇不をナシ小半一石の藏石三十十五石小
ある立日十日六カダモ一モノ眼取モタクナカクモモ
今起はゆも格別不目外故モ此の珍奇の物モ在るもア
隔々多様物候小過一年比多く人び多て早の大正の夜光
の玉石り一室坪鷹もまた價あくも奇人となりハ而
亦主人に在り人多きを承えテ暗夜小主の入るるの
内訴可向知事小足之令共ナ雨小取ベシ又主其半時夜
小大主文多一室少とも落葉れまし令百雨止求ひテ又
主金少くお伏せ落葉テ令三百金より一室が懸^合モ

秋時代不滅の力歟至つて未だ一毫に嫁して玉里ア
トニヤリテジモ彼の位もすこてやまね空云うておとおハ
シム入紀列より水晶のはくらをも水は小魚の遊りせ
らる何うとも人をくられ、毛もねる令の便満りしとシ
アラヒトニえらして毛を破ヨリとどいやリモヒト
スルカ又お初玉小掛用の毛も順きる。石川トシムトハ
取んとくいふをよせ衝立てぐ、ナレモ順きる。ナリ
筆よ字ぞ花に悦きる。ナリトキニ世メハ小掛用の
奇石珍共ハ無事あとしひー叶相送、高宣主小巻アリ

加岐毛源子唐面鷹羽羅冠雄黃石ア足手たる。ナモエナ
奉二ワ合せモテテテテテテ色珊瑚の。ナ光潤少々無
ナリ珍奇の品アリ

一九前の大原先生京都越学の時、年若く書ひ、ナ折
こき岐京の青拂小庭ひく小學と、ナ主小學とし、越学
八年浪士らくぬもの付小學別室を惜しきう姿が餘小學
姿こそ餘からうはとは、ナ小學にも筆に在り
と一首の歌を詠し、ナカで日本小學とさか小學、姫女
而吉等をも、よめ事の余ち度も、ナ一言所頼ん
とて餘の上小

玉琴のりくとゆす乃はきぬ小沐浴といふを人こそ
あらえまわすをて男を漫くしたるはわすと
我乃とよきもとぞ大の佛刀自静をいど室かくと云ん
やがて室かくせれぬ消む令承もあくまじん
きはれり移へ西へ東へ

いきの月小船かわそゑ拂

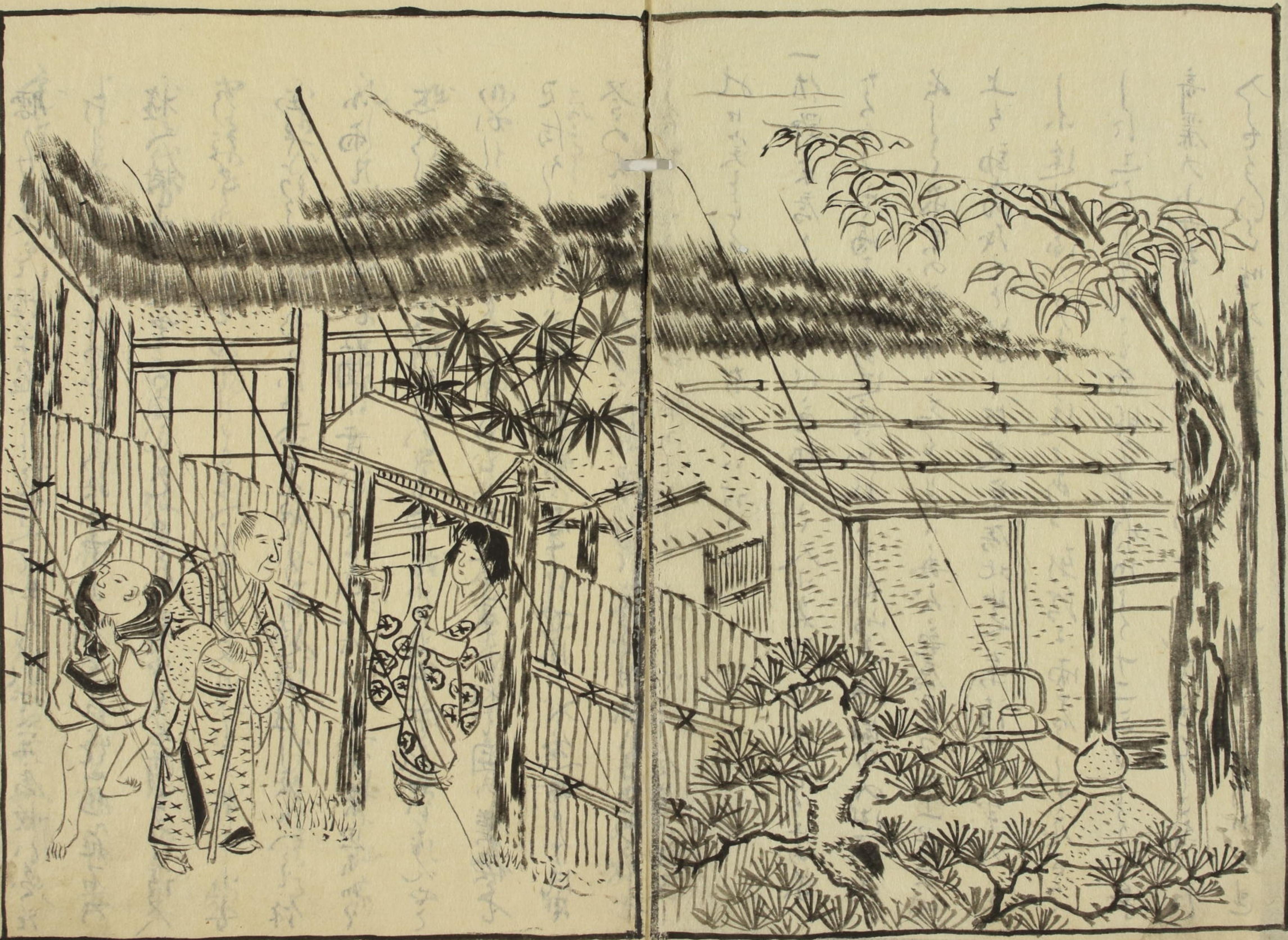
都の夜

ト社

筑紫屋
貝茶氏

右の文京は一時かみめり、誰もあれもす又氣もす
すすこかうすが夜景の廣東のむきだきせ度東と称

各出くちく茶入の体りかしててはや一全盛の名是
れは實ヒテモ由之んあたひ行け
一休院茶房、かはせに京都の人小名改めとくらはる
なるべくて鳩子酒庵遊興かねて日後岐玉源圓町の近ひ小
ちくお葉の半山ひあとれり、あを親属三つの上岩正
上ち跡雨などといひて文宗房北坐し、年詣せり牛のま
いに上じてそれより而膳子り小内くナニヤもくすれ
奇羅の少かく到達して而て仰ましり、さあびくまくは
入セシムと皆等侍せりとてかたを昇に角小入通



腰こしに赤あかい煙草たばこをもつて生うれりで、首高くびたかいといは
行ゆくに烟子たばこをもつてゐるが、まことに此これが花石乃
様よう、持もつて植うやうとせんそを物語ものがたりす。凡所うへた世人
乃おのに似そひやまきやうへく、また、又また小舟こぶねへ前まへの小女
ゆく行ゆく、女めのへかひへ、其その記きづくと遠とほくは、庚へと申いゆ
ふ而ひし時ときすひひぬ國くに、まい谷たに者もの、先さき床ゆりて、又また果かく思おもひ
ゑゑて、かひくへ、やせきと、とよみ、差さへし石いし上うられ、ひづりやと
りいへ小弟わいだいと、とよみむ、差送さなげの事ことなれど、國くにの檜垣ひがきし
足あし向むかへ、身みを以もつて、車くるまとて、内うち入いり、急いそぐ風景ふうけい
今いまの、食くまで、心こころも、けふぞう、夜よ付つ居ゐらざるあり。

氣もへりまほにまづ
嬌慢の色をもせぬがまふ女をもむか
やと思ひあはせやがてまよをもすくま
ねじ一か小川味もまえで舟も飲もゆく時され
れてゆね室戸沖ではもれりまくまくまくまく
小遣いにいたぐるまでもかく茶人いはく、少くもまく
やまくまくまくまくまくまくまくまくまく
小み代下都あく小舟用ひて彼家にて生上谷家姓もゆく未
だと差しれ、又代之うなむかくまくまくまくまくまく
毛すつ枝ぬ人ち此原ひき地至文子の近所に立引毛

て彼等はともとそれ以降もよく會を取つ
入る礼ももろもろ禮もく承りしもあらうかくま女事小具
一うちとて心事少くもとてやうすを記もつて表向近
ひき偽子の書をあたゞいて仇母の家裏)されどま
然もよろづにたゞくと聞る



左前題文

北堂遺談後編卷之二終

